

ポルノグラフィ・ファンは誰に何を語るのか

——女性向けアダルトビデオを視聴するファンの語りの戦略——

服部 恵典

ポルノグラフィ消費を孤独な営みであるとする理解に対し、ポルノファンもコミュニティを構築していることが注目され始めている。特に、1人でポルノを楽しめる時間と空間の獲得によって女性のポルノ視聴者の増加を説明する枠組みに対して、日本の女性向けAVを視聴するファンが集い、語る場を得ていることが指摘されている。しかし、先行研究に共通する問題として、ポルノファンの語りをコミュニティ内部に限定している点がある。これに対して本稿は、女性向けAVを視聴するファンが、コミュニティ内外の聴き手に対し、AVや性について何をどのように語っているのかに着目した。これによって、ポルノ消費を「個人」か「(1つの)ファン・コミュニティ」かという大掴みな図式で捉える場合に見落とされる、ファンと非ファン間の摩擦や、多様な語りのニーズを持つファン同士の緊張関係、そしてそれを乗り越えるためのファンの語りの戦略を明らかにした。

1 問題の所在

ポルノグラフィは、普通独りで楽しむものであるという前提がある。性に関する特定のストーリーが特定の時機をもつ要因を、ストーリーに耳を傾けてくれる集団の存在で説明するK. プラマーは、「おそらくセクシュアルな物語のなかでもっとも孤独なものは、マスターベーションのときのファンタジー」(Plummer 1995=1998: 74)であり、執筆当時はまだ『ポルノグラフィが好きなだけ』の、エロティックな楽しみのために使う、ふつうの人たちが語るふつうのストーリーはほとんどない(Plummer 1995=1998: 240)と述べていた。また、ポルノを歴史社会的に分析した赤川学によれば、「ポルノグラフィを受容する主体の登場は、大量安価販売で黙読を要求する近代小説の成立と、個室空間においてひとり黙読するという実践様式の編成という二つの線分が交錯する場所において誕生」した(赤川 1996a: 94)。このポルノを楽しむ1人きりの空間と時間の獲得にはジェンダー差があり、現代の女性がポルノグラフィを楽しめるようになった要因として「行政的な規制、インターネットなどのテクノロジーに関する教育、ケーブルテレビを申し込んだりコンピューターを購入したりできる経済力、そして、毎日の家事や育児の最中にポルノを楽しめる時間と空間」(Juffer 1998: 56)が指摘されている。

しかし他方で、ポルノファンもまた一般的なファンと同じくコミュニティを形成して集団的に消費していることが、近年注目され始めている。ポルノを集め、分類し、評価するファン同士の集まりはヴィクトリア朝時代からあったが、インターネットの登場がその可能性を大きく広げた(McKee 2018)。無料ポルノサイトの掲示板の書き込みから語の共起ネットワークを描き出したS. リンドグレンによれば、もはやポルノ視聴者は孤立した一匹狼ではない。そこに集まる男性ファンは、妻・恋人、女優を周縁に置きながらホモソーシャルを構築している(Lindgren 2010)。こうした研究群は、単純な悪影響パラダイムを超え、ポルノ消費が楽しめる複雑なコンテキストを深く理解することを目指すポルノ研究の潮流(Daskalopoulou

and Zanette 2020; McCormack and Wignall 2017) に資するものであるといえる。

男性ポルノファンによって周縁に置かれがちな女性たちもまた、ポルノのファン・コミュニティを形成していることが、A. ハンブルトンによって指摘されている。ハンブルトンが着目したのは、日本有数の AV (アダルトビデオ) 会社であるソフト・オン・デマンド株式会社が 2008 年に設立した女性向け AV メーカー・SILK LABO である。日本の AV 市場では、女性向け AV の制作はそれまでも何度か試みられていたが、ほとんどが単発的に販売されるのみで終わっていた。ゆえに、SILK LABO は日本で初めて継続的に制作を続けている女性向け AV メーカーであるといえるだろう。SILK LABO 作品が既存の AV と異なる点として、既存の男優の色黒で筋肉質といったイメージを排除し男性アイドルのような清潔感を演出した点、トレンドドラマのようなストーリーを取り入れた点、視覚的に誇張された乱暴な性行為を行わない点、男性の身体が女性視聴者の性的欲望の対象・客体として映されている点などがある (Hambleton 2016)。特に本稿にとって重要なのは、SILK LABO の作品を視聴するファンが、Twitter やオフライン・イベントを通じ、ポルノを媒介として集い、語る楽しみも見いだしているという指摘である。「以前はタブーだった女性のセクシュアリティや快樂というようなトピックについての会話を普通なものにすることを手助け」し、「家庭内空間でファンタジーを共有すること」を可能にしたことが、これまで他社が失敗してきた領域で SILK LABO が成功した要因の 1 つであると分析されている (Hambleton 2016: 435)。プラマーがセクシュアル・ストーリーの登場を聴き手コミュニティに着目して論じていたこと、ポルノのファンもコミュニティを形成していること、しかしポルノ消費が可能な条件の獲得にジェンダー差があることを踏まえると、ハンブルトンの指摘は重要である。

しかし、ハンブルトンの研究にはまず、オフライン・イベントとオンライン・スペースという語りの場の存在を指摘しているだけで、語りそのものの分析に踏み込んでいない点に限界がある。ゆえに、ファン同士で語られているという「女性のセクシュアリティや快樂というようなトピック」とは具体的には一体どのようなことなのか、いまだ明らかになっていない。ファン・コミュニティで語られるセクシュアル・ストーリーの内容を明らかにしない限り、ファン・コミュニティが語りを生み出したという説明は不十分なものに留まる。

この第一の問題に重なる問題として、ファンに語らせる力をコミュニティの存在のみで説明しており、日本の女性向け AV のコンテンツの特徴とファンの語りとの関連が不明なままである。ハンブルトンは、SILK LABO の注目すべき点として、ファン・コミュニティを作り上げる要因となったテクノロジーとイベントの活用のほかにも、メーカーおよびその作品を誕生させることになった経済的要因、作品における女性の視線の構築など様々提示しているが、それらの関係性が不明なまま総花的な記述に陥っている。

最後に、ハンブルトンだけでなくポルノファンの先行研究に共通する問題として、ファンのコミュニケーションの場をコミュニティ内部に限定している点がある。言い換えれば、ポルノは他者とコミュニケーションせず独りで楽しむか、ファン同士で摩擦なくコミュニケーションを楽しむかに、捉え方が二極化しているといえる。

ポルノ研究は、これまで見てきたとおり、視聴者個人だけでなくファン・コミュニティにも関心を向け始めてきたが、ファン研究は逆に、個人としてのファンに力点を移行させてきたと整理されることがある (Busse and Gray 2011; Hellekson and Busse 2006)。すべてのファンがコミュニティに属するわけではないし、個人の愛好心やファンになる動機といったテーマは解釈共同体モデルでは捉えきれないからである。さらに近年では、コミュニティから個人としてのファンへ、というファン研究の潮流の整理は素朴すぎるという指摘もある。ファン・コミュニティ研究は今なお健在であり、また個人としてのファンに焦点を当ててきたとされる研究者であっても、コミュニティとの関連を無視するわけではない (瀬尾 2020: 30)。たとえば大尾侑子は、ヴィジュアル系ファンを事例とし、ファンが「集団としてのファン」カテゴリーの受容／拒否を通して個人としてのファン・アイデンティティを提示する戦略を描き出した (大尾 2016)。

つまり、ファン・コミュニティへの着目は今なお重要なのだが、一足飛びにコミュニティに焦点を移行させたポルノファン研究に欠けているのは、ファン・コミュニティ外でのファンの行為への着目である。個々のファンは、ある商品の受け手としての「ファン」という属性のみには還元されない人間であり、ファン活動は日々の活動のうちの一つでしかない (高艸 2020: 54)。逆に、大尾は「モバイル端末で“いつでも／どこでも”ファン活動がおこなえることから、『労働／余暇』区分に限らず常時途切れることのない時間感覚に貫かれていること」を1つの特徴とする「フルタイム・ファンダム」が現在のメディア環境の特徴であると指摘している (大尾 2021: 225)。総合すると、友人や家族などファン・コミュニティ外部と関わる日々の活動に際しても、彼・彼女らは「ファン」としての自己を保持しうる。ゆえに、ファン・コミュニティ外部とのコミュニケーションも、独りではないポルノ視聴者の営みとして注目する必要がある。このことは、「セクシュアル・ストーリーは個人的なナラティブであり、毎日の活動と日常生活の戦略のなかに社会的に埋め込まれている」(Plummer 1995=1999:30) というプラマーの指摘とも響き合う。

ファン・コミュニティ外部にポルノファンであることを表明する場合は特に、「“ファンとしての自己宣言”の問題」(池田 2014: 79) がありうる¹。「私は〇〇のファンです」という語りは中立的で無害な表現ではなく、「不適切な」アイデンティティの表明として自他を脅かすことがある。もちろん、今や何かの「ファン」であることは人々にとって珍しいことではなくなり、ファン一般に「狂信者 fanatic」というスティグマが付与されることは少なくなりつつある。しかし、ハンブルトンが対象とした女性向け AV を視聴するファンの場合、ファンとしての自己宣言はいまだに、性的に放埒、欲求不満、パートナー以外に浮気をしているといった負のレッテル貼りによって応答されうる。

そこで本研究は、女性向け AV を視聴するファンが、ファン・コミュニティ内外の誰に対し、AV や性について何をどのように語っているのかに着目する。それによって、ファン・コミュニティ内のセクシュアル・ストーリーを明らかにするだけでなく、ポルノ消費を「個人」か「(1つの) ファン・コミュニティ」かという大掴みな図式で捉える場合に見落とされる、ファンと非ファンの間の摩擦や、多様な語りのニーズを持つファン同士の緊張関係、そして

それを乗り越えるためのファンの語りの戦略を明らかにすることを目的とする。

2 調査方法

2-1 インタビュー協力者の募集方法

本研究は、女性向け AV を視聴するファンへの半構造化インタビューを行った。女性向け AV を視聴するファンを対象とした理由は、女性たちが性について語れる場を SILK LABO が提供したというハンブルトンの指摘を、さらに掘り下げて分析するためである。

本稿は、ファンを研究対象とするに際し、「ファンアイデンティティを持つ者」(池田 2014: 79) という「ファン」の定義を採用する。「すべてのファンがファンコミュニティに所属するわけではない」ことを踏まえつつ「“ファンとしての自己宣言”の問題を考える」上で有効な定義であり(池田 2014: 79)、本稿の目的に沿うからである。逆に「非ファン」は「ファンアイデンティティを持たない者」を指している。

インタビューへの協力者のほとんどは、ソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) である Twitter を通じて募った。これは以下の 2 つの理由による。

第一に、SILK LABO 作品を視聴するファンにとって、Twitter はファン活動のための情報資源と同志が集まる重要な場だからである。たとえば、新作やオフライン・イベントの情報、撮影の舞台裏の写真が公式アカウントから発信されるだけでなく、新作の同時視聴なども行われている (Hambleton 2016: 434)。表 1 のインタビュー協力者リストの G さん、I さんは、ファンになってから必要に駆られて Twitter を開始している。

第二に、筆者が調査以前から Twitter を通じて、女性向け AV を研究する大学院生であると認識されていたことが、ファンのインタビュー協力の安心材料になると思われたからである。言い換えれば、女性のポルノ消費について男性が尋ねることは一般的に警戒されるが、あくまで学問的関心からファンと接触したいのだということが、Twitter を通じて一定の信頼をもって知られていたと思われる。筆者は、2015 年頃から、女性向け AV を対象とした卒業論文を執筆するにあたり簡単なアイデアやメモを Twitter に書き記していたことで、一部のファンと相互フォロー状態になっていた。さらに、SILK LABO に多く出演していた人気 AV 男優の一徹本人からも卒業論文が読みたいと連絡があったため、ファイルを送付した。これを Twitter で報告したことをきっかけに、30 名強の一徹ファンからも連絡があったため、同じく論文ファイルを送った。また、調査者は 2016 年 4 月より 1 年間、ウェブメディアで AV を中心としたポルノグラフィについて書く隔週連載を持っていた。これは研究というよりエッセイに近かったが、卒論よりも読者を持ったため、大学院で女性向け AV について研究しているという肩書に嘘がないことを広く印象づけたと思われる。ただし、調査者をウェブ記事や Twitter、論文を通じてよく知っているからこそ話づらいこともあれば、「研究者」の期待に応えて過剰に語ろうとしてしまうといった、インタビューへの影響もありうる。

SNS 利用者を中心とした募集には偏りがあるが、AV 視聴者の語るという行為に焦点を当てる研究目的上、ある程度は必然的ともいえる。もちろん、Twitter を利用せず、交流に関心がなく、ただ独り作品を視聴することを楽しみとする視聴者の存在も想定可能である。しか

表1 インタビュー協力者のリスト

	年齢	居住地	日時	時間
A	30代	関東	2017/02/08	1時間
B	20代	関西	2017/02/09	1時間
C	40代	関東	2017/02/20	1時間
D	20代	関西	2017/02/22	1時間
E	40代	関東	2017/02/22	1時間
F	50代	関東	2017/02/25	1時間半
G	50代	関東	2017/03/09	2時間
H	40代	関東	2017/03/18	2時間半
I	40代	関東	2017/04/19	2時間半
J	40代	北陸	2017/04/27	2時間半
K	20代	関東	2017/07/01	2時間

し、本調査の目的は、社会調査によっては原理的に接近不可能なこうした類型を含む「女性向け AV の視聴者」全体の把握というよりは、聴き手やコンテンツの特性がいかに関わっているかを分析することである。

加えて、調査者側から個人に調査協力を打診しているというよりも、語れるファン、語りたファンが積極的に参加しているという偏りがある。裏を返せば、そのようなファンであっても語らない・語れない主題があれば、その主題は他のファンも語らない・語れない場合が多いだろうと推測できる。

逆に、Twitter での語りを直接にデータとしなかったのは、相対的にファンや AV 界限でコミュニケーションが閉じていると想定され、ファン・コミュニティ外との関わりも含めて分析するという本研究の目的にそぐわないからである。翻って、コミュニティ内部に向けてツイートしたくとも、不特定多数に読まれることを意識せざるを得ないともいえる。このように、誰に対する語りなのかをファンが完全にはコントロールしきれない点も分析を難しくしている。とはいえ、Twitter がファンにとって重要な語りの場であることは間違いのないため、分析は今後の課題とする。

調査協力者を募集する際、調査者の所属や、調査者が男性であることを明示し、インタビューは録音されること、答えたくない質問に答える必要はなく、録音を止めることも可能であることを伝えた。さらに、インタビューで得たデータは研究目的以外に使用せず、流出させないこと、音声データの文字起こしを確認して、研究に使用してほしい箇所があれば削除できることも書き添えた。

2-2 インタビュー協力者の概要とインタビュー方法

前項の方法で募集した結果、Twitter を通じて 8 名の協力を得た。さらに、E さん、K さんとは筆者の知人からの紹介で出会い、J さんとは AV に関するイベントを介して出会った（なお、数年 SNS を使っていないと語っていたが、アカウントを持たずに Twitter を閲覧しては

いた)。

こうして半構造化インタビューを行った11名の年代、居住地、およびインタビュー日時は表1の通りである。ただし、狭いファン・コミュニティゆえに、匿名化のため職業、ファン歴などは掲載しない。

ポルノファンを研究するにあたっての重大なデータの欠陥として、本調査は性自認と性的指向を明示的に尋ねていない。調査者が当時、インタビュー協力者がシスジェンダー、ヘテロセクシュアルの女性であるという固定観念に囚われていたことは認めざるを得ないだろう。なお、11名のうち1名は「バイ(セクシュアル)の気がある」と語った。しかし、本稿の範囲ではこのことが語りの解釈を大きく左右させないと判断し、匿名化を優先する。他10名も異性愛者であることは保留し、またインタビュー協力者11名を便宜的に「女性」「彼女」と呼ぶが、シスジェンダーであることは断定しない。

調査が行われたのは、2017年1月末に一徹がSILK LABO 専属男優を「卒業」した直後であった。すなわち、一徹ファンのためのオフライン・イベントをSILK LABOが主催していた最後の世代のファンであったといえる。その後、一徹はフリーランスとして個人でファン・イベントを開くことが増えた。もちろん、2020年以降は新型コロナウイルスの影響でオフライン・イベントの開催が激減している。また、調査者は2017年当時、修士課程1、2年の大学院生であった。ゆえに調査者は、「研究者」が持つある種の安心・信頼(もちろん調査者の権力性はゆめゆめ忘れてはいけない)と、「学生」であるがゆえの相対的な地位の低さが融合した聞き手であっただろう。

インタビューを行う場所は、対象者の選好に合わせた。たとえば、自宅から近いほうが話しやすい人もいれば、逆に遠いほうが話しやすい人もいるだろう、という判断である。また、周りに誰かいたほうが安心できる人もいれば、話の内容が内容だけに、他人に聞かれないよう2人きりのほうが話しやすい人もいると考えられる。そこで、基本的には個人でインタビューを受けてほしいが、グループインタビューも可能である旨も伝えたほか、場所はインタビューの自宅、飲食店、カラオケボックスなどから選んでもらった。結果として、すべてのインタビューは2人で行われ、その多くは主要駅近くのカラオケボックスまたは飲食店の個室で行われた。

T.メイ(May 2001=2005)の指摘に倣い、半構造化されたインタビュー項目は、当たり障りのない話題から順に聞くように努めた。たとえば年齢、職業などの対象者の属性から始め、週にどれくらい視聴するか、観る際はどのメディアを使うかなどを尋ねたのちに、男性向けAVと女性向けAVのどこが好きでどこが嫌いか、といった自己の性的欲望にかかわり一般的に語りづらいつと思われる事柄を質問した。また、女性向けAVを視聴するファンであることは誰に話し誰には隠しているか、今回インタビューに答えてくれたのはなぜか、といった、本稿のテーマに関わる項目も尋ねている。

調査の結果、インタビュー協力者のファン・アイデンティティは、SILK LABOの作品を視聴したり、SILK LABO主催のファンイベントに参加したりしていても、『女性向けAV』というジャンルやメーカーのファンというよりも『AV男優のファン』であった(服部2020:

47)。表1の11名のうち、EさんとKさんはムータン、他9名は一徹という男優のファンである。両者とも、SILK LABOのAVに多く出演していた男優である。特に一徹はその人気ゆえに、(同じく人気男優である月野帯人とともに)2012年12月に日本のAV男優初のメーカー専属契約をSILK LABOと結んだ。さらに一徹は、2016年8月1日に、同じくソフト・オン・デマンドグループに属する女性向けアダルト動画サイト・GIRL'S CHとダブル専属契約を結んだ。そのため、2017年1月末に専属契約から「卒業」するまでの約4年間は、他メーカーに出演しなかった。ゆえに、「男優ファン」であってもSILK LABOと密接な関わりを持っていた。

しかし、インタビュー協力者は「『男優ファン』となったことを入口として、今では『AV監督ファン』『AVファン』となっている」(服部2020:49)場合もあった。なぜなら、好きな男優の過去作含む出演作品を、その作品の監督や共演女優などのファンになっていきっかけ、M.ヒルズの言葉でいえば「アクセスポイント」(Hills2014:16)とする場合があるからである。そこで本稿では、女性向けAVのどの要素が好きなのか、AV視聴のうち女性向けAVの割合がいくらなのか、他に何のファンであるのかに関係なく彼女たちを総称する場合、「女性向けAVを視聴するファン」と呼んでいる。

3 分析——誰に何を話すのか

本節では、女性向けAVを視聴するファンが、ファン・コミュニティ内外の誰に話すときに何を話すのかに着目して分析することで、彼女たちが軋轢を避けながら他者とポルノを楽しむ技法を明らかにする。3-1項では、友人やパートナーといった非ファンに対して、AV男優を「俳優」や「アイドル」のように紹介するという語り方を議論する。これによって、非ファンとも共通の話題で盛り上がり、ファン活動が止められることを防いだりすることができるようになる。3-2項では、ファン・コミュニティは非ファンとは異なり、安心して男優について話せる場でありながら、セックスやマスターベーションといった自己の性的経験の語りはやはり避けられやすいことを指摘する。この点は、SILK LABOの作品性とも関わっている。3-3項では、自己の性的経験についても語りたいファンはファン・コミュニティ外に別の語りの場を発見することでニーズを満たしていることを指摘する。3-4項では、ファン・コミュニティに属さないファンであっても、あえて積極的に女性向けAVを視聴するファンであると話すことで自己像・女性像を書き換える戦略を持つことを論じる。

3-1 非ファンに話す——AV男優であることを避けて話す

女性向けAVの男優が好きであることは、文字通り「人に言えない趣味」(Cさん)であると感覚されているが、非ファンに対しては、隠さなければいけないというより、わざわざ話す必要がないことも多い。たとえばHさんは、女性向けAVを視聴するファンであることを隠すというよりも、「話題が違う」場合が多いと述べている。すなわち、家族の話や職場の話が多い相手とは「その趣味の話にならない」し、「私もその人の好きなもの聞かないし」という関係性である。

しかし、「普段生活していると、それこそ好きな俳優さんの話する」ような友人とは、話の流れで俳優について触れることがあるという。ゆえに、調査者はHさんに、AV 男優ファンである前から友人とは性的な話題を楽しむ間柄であったのか尋ねたのだが、返答は以下の通りである。ここでは、調査者がもっていた「AV 男優の話は『下ネタ』だ」、すなわち「AV 男優とはエロティックな存在だ」という無意識的な先入観が、Hさんとの間で共有されず、混乱が生じている（以下、調査者＝Q。筆者の補筆は□で表記する）。

Q：[友人とは] 元々何だろう、そういう下ネタとか性的な話っていうのは。

H：してないです。

Q：あ、してないけれども。

H：してないから、してないですよ？ そのときも。言うだけで。

Q：ええ、ええ。あ、一徹が好きっていう話しかしない。

H：みんな下ネタも言ってこないし。

Q：一徹の話は下ネタ……下ネタもありうるけど下ネタじゃない部分も、で、楽しんでる？

H：……下ネタにならないですね。

Q：うーん [5 秒沈黙] イベントに行った、ハグされた、ぐらいまでの話。

H：そう。だってそれ以上されてないし。

Hさんと調査者の間で「下ネタ」という言葉でイメージしているものが異なっている可能性はあるが、少なくとも、「性的な話」がされていないことはわかる。もちろん「性的な話」も人によってイメージする内容は異なるが、AV で演じられる「ハグ」を超えた性行為については話されないようである。特に、「下ネタもありうる」のではなく「下ネタにならない」のだと語っており、話したいが我慢しなければならないといった状態にあるわけではないことは重要である。あくまで「好きな俳優さん」の「イベントに行った」に近い楽しみ方であり、友人にそう伝えるときに「下ネタ」は必要ないのだ。

また、非ファンのなかでも、オフライン・イベントに行くときや視聴機材を買うときなどに話す必要が生じやすいのが、時間を共にすることの多いパートナー（特に配偶者）という聴き手である。インタビュー協力者 11 名のうち、A、C、F、G、H、I、J さんの 7 名に配偶者がいた。しかもパートナーは、説明の仕方を誤った場合のリスクが非常に大きい。今回の 11 名のなかには、何の問題もなくパートナーと AV を楽しんでいるケースもあれば、思わぬ事故でパートナーにばれてファン活動を半ば止められている者もいた。最悪の場合には、AV 男優に熱を上げることが浮気同然だとパートナーに理解され、離婚する夫婦もあると耳にしているファンもいる。

オフライン・イベント参加経験のあるファンは、男優に会えるこの機会を大きな魅力としていることが多い。SILK LABO のオフライン・イベントは、2010 年頃から始まり、AV 男優の一徹と月野帯人が SILK LABO と専属契約を行っていた 2012 年から 2016 年にかけて特に行われた。内容はさまざまだが、女性客限定で、都内のトークライブハウスで行われること

が多い。1時間程度のトークライブや企画ののち休憩をはさみ、後半では抽選会が行われる。SILK LABO というよりトークライブハウスの仕組みだが、抽選会のくじは飲食代に比例して与えられる。当たった人は男優の私物や2ショットチェキ、ハグの権利などがもらえる。詳しくは、ハンブルトンが2013年5月のイベントを活写している(Hambleton 2016)。

このようなオフライン・イベントであるがゆえに、Fさんはパートナーへの伝え方に工夫が可能になっている。

Q：旦那さんにはバレないんですか？ 外出る回数増えたら。

F：えっと、男優さんとは言ってないけれど、すごく応援してる男の子がいるって話はしていて、その人は地下アイドルじゃないけど、そういう人がいますって話をして、で、その人のイベントに行くって言っていて、お酒も飲むし、握手とかもします、っていう話を、一緒に写真も撮ります、抽選とかがあって、それで当たれば。ってことまでは言ってます。ただその相手がAV男優さんとは言ってないだけです。

Fさんが、自分より若い男性が主役のイベントに行き、お酒を飲み、握手をし、その場で抽選に当たれば一緒に写真が撮れるという説明は、AV男優であるということだけは隠しているものの、事実と異なることは一つも述べていない。したがって、パートナーに対し、好きになった男性を「地下アイドル」に似たような存在として説明可能である。これは単に嘘をつくよりも負担がなく、また配偶者に対し隠し事をする罪悪感も減じることができるだろう。以上のように、単に好きなAV男優の話題を避けるのではなく、「俳優」や「アイドル」のような側面のみ語る、「嘘はつかない」という戦略がある。

では、彼女たちは単に「俳優」「アイドル」を好きになっているだけなのだろうか。筆者は、俳優やアイドルであるかのようにAV男優を愛するのであれば、観る映像がAVである必要はどこまであるのかと尋ねた。というのも、まず前提として、SILK LABO 作品は、トレンディドラマを参考にしているがゆえの「セックスシーンに至るまでと、セックスを終えてからのドラマパートの長さ」(服部 2020: 51)が特徴である。この点を、女性向けポルノはなぜ物語部分が長いのかと問うこともできるが(堀 2009; 守 2010)、逆になぜAVではなく「トレンディドラマ」ではいけないのかという問いも可能だと思われたからである。

しかし、ファンにとっては、ベッドシーンを演じるというより実際にセックスを行う「AV男優」であるということこそが重要であった。配偶者に対して一徹を地下アイドルのような存在として説明するFさんであっても、なぜAVでなければいけないのかという調査者の問いに対し、「かっこよくって、演技が上手な俳優さんはいっぱいいますけど、そこにプラスエッチが乗っかることで、一徹さんっていうことじゃないですか」と答えた。好きなAV男優の魅力は、本来的には彼らのセックス抜きで伝えることはできないのだ。

たしかに、「私、別に一徹くんのことをどけたら『AVがAVでなければ!』っていうものがあるわけではない」と語ったIさんのようなファンもいる。しかし、11名のなかで最もAVに対してこだわりがなかったといえるIさんといえど、「一徹くんがせっかく頑張ってるんだ

から。良いもの作ろうよ、AV 男優さんなんでしょ、っていう思い」がある。実際、I さんは、ある SILK LABO 作品が一徹の代表作とされていることに対し、「ドラマに重点置きすぎ、プロローグ長すぎ、で絡みがあっさりしすぎては何のためのプロローグか分からないなっていうのが私の感想」と批判していた。セックスシーンこそが主であり、ドラマパートはあくまで引き立て役にすぎないのである。

以上のように、実際にセックスを行う AV 男優であることこそがファンにとって重要であるという前提がありつつも、友人やパートナーなどには彼らの俳優やアイドルに類似した側面のみ話すことで軋轢をなくす語りの戦略がある。家庭との調整が必要という意味で、AV 男優を迫るのは 1 人で行いたくても 1 人で行える趣味ではない場合がある。そして、非ファンの友人であっても、「好きな俳優さんの話」のように語る形式によって、共通の話題で盛り上がるのである。ハンプルトンは、SILK LABO のイメージ戦略として、俳優にアイドルのような清潔感を持たせたこと、トレンドドラマを意識した映像になっていることは指摘していたが (Hambleton 2016)、ファン・コミュニティや語りとの関係性は十分明らかにしていなかった。

3-2 ファン同士で話す——AV について自己の性的経験を避けて話す

前項で見たように、あくまで AV 男優として好きであっても、非ファンに対してはその性的な側面を避けつつ語る方法があったが、ファン同士の会話ではどうなのか。

目に見えるファン・コミュニティの存在²は、たしかにハンプルトン (Hambleton 2016) が指摘したとおり、個人としてのファンに安心感を与えていた。たとえば、2012 年 9 月にケーブルテレビのアダルトチャンネルで一徹を知った G さんは、「初期にファンになった人って、必ず最初、私も含めて、AV 男優を好きになっちゃったでしょう、っていう葛藤がある人がほとんどだと思う」と述べている。逆に、『有吉ジャポン』(2013 年 3 月) や『アウトデラックス』(2014 年 2 月) などの地上波放送のテレビ番組に一徹が出演することが増えてきた以降のファンのことを、一徹が「アイドルになっちゃった」ので「違和感なく入ってこれたみたいな感じがある」と観察している。しかし、ファンになることの葛藤を他のファンに相談した結果、「みんなとつながっていると、そこの中だけでもファンの人がいて、なんか心強くなれるっていうのをみんなが言っていて、だから『そうなんだ』って思っ」たのを機に、ファンになること、自分をファンと認めることに「踏ん切りがついた」という。オフライン・イベントに参加したときの驚きや安心は、「あ、ほんとにいるんだ！」(J さん)、「おばちゃん多いなみたいな (笑)。で、安心しました」(F さん) など、他のファンからも聞かれた。

この安心感は、女性向け AV を観始めるまで性的関心が強くなかったと語るファンにとっては特に強く感じられるだろう。たとえば、ファンになる以前は「[AV は] 結婚前、ラブホテルでちょっと観るぐらい」(F さん)、「20 代の頃とか、30 代の頃……はそんなに興味がなかった」(H さん)、「ほんとに、保健体育ぐらいの知識しかなかった」(I さん) というファンもいる。特に I さんは「AV とは無縁で、友達とも性の話題に踏み込むことはでき」ず、「誰にも相談できなくて、でも、そこを避けて通ることはできなくて、わからないから我慢することもあった」という自分に性について学ぶきっかけを与えた AV 男優の一徹には、非常に

感謝しているという。

しかし、ではIさんが友達と性的話題に踏み込んで相談するようになったのかということ、そうではない。もちろん、一徹によって解消された悩みは多く、一徹について話せるファンが存在は「リアルな友達にはそういう話ができない」ので重要である。しかし、ファン同士であっても一徹の作品やイベントの評価を離れて性的な話題が出ることは極めて稀である。調査者がIさんに女性向けAVとマスターベーションとの結びつきについて尋ねた場面では、「そんなことは話したことがない」と返答があった。

Q：その、性的な話を誰かに相談できなかつたりすると。で、さっきそのおっしゃってたのは、マスターベーションの話とかを、全然することがない。

I：うん。

Q：その、結局女性向けAV、一徹さんのファン同士でも、やっぱりその、性的な話題っていうのは。

I：あ、そういうのって、出ないです。

Q：全然出ないんですね。

I：出ないですね。そのオフ会に行っても、「一徹くんのこういうところがいいね」「一徹くんの作品のこういうところがいいね」っていう話題ばかりで。

ただし、マスターベーションが語られないのは、語りの場の規範の問題だけでなく、女性向けAVとマスターベーションとの結びつきが弱いことも関わっていると思われる。端的に言えば、彼女たちは女性向けAVや好きな男優の出演作を観ても、必ずしもマスターベーションのための性的興奮の材料、いわゆる「オカズ」として利用するわけではない。インタビューに協力した11名のうち、女性向けAVを観て必ずマスターベーションに用いると答えたのは1人もおらず、中には、女性向けAVでは一度もマスターベーションをしたことがないというファンもいた。11名のうち最も強くマスターベーションと結びつけた女性向けAV視聴をしていたKさんは、マスターベーションの素材として観る割合は「9割だと思う」と答える。しかし、「男性向けで観るときはもう100パー、もう、マスターベーションのためだけに観」ており、「女ですけど『抜く』っていう言い方するとしたら、抜くために観てますね。だから、それで抜けなかったら、もう、もう、すごい、消化不良みたいな感じになるんで、何としてでも、抜けるまで探して、『これかなあ』みたいな感じで、もうすっきりして寝ます」とも述べている。女性向けAVが性的興奮を催させないと結論づけることが不可能なのは明らかだが、Kさんであっても「女性向けの観るときは、ほんとに……別にしなくてもいい」のである。また次節でも取り上げるCさんは、周りのファンはマスターベーションについて黙っているだけであって、「みんなしてると思うんです、変な話」と考えている。すなわち、Cさんには、マスターベーションの話題はファン・コミュニティの規範が語らせていないように見えている。しかし、そのようなCさんですら、マスターベーションとの結びつきは「女性向けはないです、あんまり。やっぱり」と述べるのである。

以上、本節でみたように、ハンブルトンの指摘のとおり、SILK LABOはファンたちに貴重

な集いの場、語りの場としてのファン・コミュニティを提供したといえる。非ファンにはアイドルや俳優のようなものとして紹介することの多い好きなAV男優を、AV男優であるという前提を共有しながら話せる点で、ファン同士の会話はたしかに必要とされている。しかし、「以前はタブーだった女性のセクシュアリティや快樂というようなトピックについての会話」(Hambleton 2016: 435)と一口に言っても様々である。女性向けAVがそもそもマスターベーションとの結びつきが弱いという性質はあるが、ファン同士であっても、マスターベーションやセックスなど自己の経験にまで踏み込んだ話は避けられるのである。

3-3 別の場を見つけて話す——自己の性的経験を話す

もちろん、自己の経験にまで踏み込んだ性的な話題は、話したいというニーズがないのであれば話す必要は全くない。何らかの抑圧があって話せないというよりも、そもそもニーズを持たないファンが多い可能性はある。

しかし少なくとも、ニーズを持つファンにとっては不自由に感じられる場合がある。Cさんは、女性向けAVを観るようになったことで、「性に対してオープンになった。なんか、今まではいけないことっていうか、恥ずかしいことだしいけないことって思って、絶対言わない、ほんとに分かり合える人とか話さないけれど、別にそれは隠すことじゃないしふつうのことだな」と感じるようになったという。だからこそ、Cさんは「深い話」ができないことが苦手で距離を置いたファン仲間もいる。

C: 変な話、[ファン仲間] セックスしてないんですよね、日常で³。だから、そういう話ができないんですよ。たとえば「一徹さんのあれが良かったね」とかそういう話はできるんだけど、そのもっと深い話ができないんですよね。

Q: なるほど、深い話。

C: たとえば、それを見て、旦那さんとか彼氏と、あの、ね? 仲が良くなったとか、そういう話が全然私できないですよ。そこがタブーみたいな。だからほんとにアイドルの人をみんなで「一徹さんってかっこいいよね」みたいなだけなので。それはそれでいいんですけど、なんかちょっと私は(笑)

Cさんにとってセックスの話は語りたいニーズがあるのだが、集まりによっては「私は充実してますよっていうアピール」になりうるのでしづらいという。また、マスターベーションも、「それイコール虚しい」、「淫乱な、スケベな人がやる」とイメージされてしまうので話されないのではないかと感じている。つまり、セックスやマスターベーションについての語り、自分が意図しない自己呈示として受け取られる危険性があると考えている。

自己の性的経験について語らないファンの態度は、Cさんの周囲だけでなく、オフライン・イベントに来るファン層に、ある程度まで一般化できるかもしれない。あくまでCさんによる観察だが、Cさんが参加し始めた2012年5月頃のイベントで行われていた、来場者の性の悩みに俳優たちが答えるというコーナーは、実際に相談するファンが少なかったことにより立ち消えになったという。

C：イベントも最初の頃はお悩みについて答えるってコーナーがあったんですね。会場に来ての方から、っていう。で、結構私はぶっちゃけ真剣に相談とかしてて、友達のとか自分のとか。でも、採用される人がほんとに決まっちゃって。私も2、3回採用されたりして。だから、[相談] しないんですみんな。みんなそれに、書かないし、相談とかも、まあ恥ずかしいってのもあるんですけど。なくなっちゃって、そのコーナーも。

誰も性の悩みを相談しなかったのではなく、Cさんのように、相談したいファンは少ないにせよ存在したことには注意が要る。3-2項で議論したような、自己の性的経験について語らないセクシュアル・ストーリーだけがファン・コミュニティのストーリーではない。ファン・コミュニティは、多様な語りのニーズを持つファンの集合なのである。

では、求める聴き手としてファン・コミュニティが機能しないCさんは、いかなる聴き手を持つのか。Cさんが、代わりに「すごい面白くて」と語るのは、「男性の方が主催で、その方に1人ずつ悩みを相談する」という「実践のやり方とかをレクチャーする講座とかセミナー」だった。この場は、ファン・コミュニティの規範から離れているだけでなく、「初対面なんだけど逆に友達とかじゃないから何でも聞ける」場であった。Cさん自身は悩み相談のコーナーに応募していたとはいえ、「イベントだといつても顔ぶれが割と同じだから」、匿名といえど恥ずかしくて話せないファンもいたと想像される。つまり、ファン・コミュニティが密だからこそ、自己の性的経験について話しづらい側面もあったといえる。

以上のように、自己の性的経験について悩みを相談したりしたいにもかかわらず、女性向けAVを視聴するファン同士の繋がりでは語りづらい規範があると感じられるファンもいる。ファン・コミュニティの語りは、複数の主題やニーズから成り立つのである。そして、自分が語りたい内容がコミュニティの中心的主题にそぐわないと感じられるファンは、別の語りの場を発見することでそのニーズを満たしていた。

3-4 あえて誰にでも話す——自己像を語り直す

最後に、ファン同士の交流が全くないと答えた、コミュニティに属さないファンであるBさん、Dさん、Kさんの3名も検討したい。彼女たちがオフライン・イベントに参加しない理由として、Bさん、Dさんの場合は関西在住でありかつ年齢が若いため遠征資金がないこと、Kさんの場合はムータンという好きな男優がすでに引退していたことが挙げられる。だが、彼女たちはTwitterなどネット上でのファンとの交流もなかった。これは、ファン・コミュニティという聴き手を持たないにもかかわらず、「AV男優」が好きであることを話せる聴き手をすでに獲得していたからかもしれない。

Bさん、Dさん、Kさんの3名は、いずれも20代で、大学でジェンダー、セクシュアリティについて人文・社会的に勉強するほど性に対する関心が強かった点に特徴がある。これに対して、前項まで中心的に議論してきたファンは30代から50代であり、女性向けAVを観始めるまで性的関心がほとんどなかったと語るファンもいた。

Bさん、Dさん、Kさんの3名とも、友人が買ってきた『an・an』（マガジンハウス）の

「セックス特集」の付録 DVD を複数人で観て女性向け AV の存在を知った、という共通の経験を語っていることは興味深い。ファンになる前から、友人同士で性的コンテンツを楽しむ間柄であったということだろう。

しかし、彼女たちには、女性の友人同士の文脈を共有できない聴き手もいる。男性の友人がその一例である。Bさんは、「私のこと全然知らん男の子に、たとえば私がポルノ観てるって話をすると、引くか、[...] 私をオカズとして見てる」ような反応が返ってくることもあるという。

だが、以下のように、語りのその場では自己呈示に失敗したとしても、徐々に自分のことを正しく理解してくれるはずだと考えている。

Q：男友達に話したときにすごい引かれたりとか、「ええやん」って思われたりするっていうのは、どう対処してるんですか。思われっぱなしだと嫌ですよ、多分。

B：まあ、そうですね。でも、でもなんかそれは、たとえば私がそうやって、ただのエロい女やって思われたとしても、友達だったら私のふだんの態度を見てたらだんだん付き合ってるうちに「あ、別にこいつはビッチじゃない」って分かると思うし、あと私が自分のやってることとかを、それこそ Twitter でも堂々と言うようにしてるし、自分のやってる研究のこととかもできるだけ周りに言うようにしてて。まあ、すぐに分かってもらえるのは無理ですけど、だんだんわかってもらえたらいいなって。

Bさんは、女性向け AV をよく観ているということは、「意図的に隠そうとはしてない」ので、「別に家族とかにも隠してない」。結果的に「引かれ」てしまっており、短期的には語りの戦略が失敗してしまっているともいえる。しかし、「逆にもうふつうのことと思って話す」ことによってスティグマそれ自体を問い返し、理解ある聴き手を自ら長期的に作っていくのである。このように、あえて積極的に女性向け AV を視聴するファンであることを表明することで、自己像、女性像を書き換えるという戦略がある。

同じようにあえて誰にでも話す戦略をとる Dさんは、その成功例であるといえるだろう。Dさんもまた「初めはたぶん両親も抵抗あって、『ちょっと』みたいな言われてたんですけど、『そんなの言っていくべきやと思う！』みたいな」ことを言っていた結果、「だんだん受け入れられてった感じがする」という。弁論系サークルに所属し、性に関わる内容のスピーチで好成績を残した Dさんは、性に対して「面白半分とか、変な欲望だけっていうよりも」、「ちゃんと向き合ってるんだなって思われて」いると感じている。こうして、「性のことに関しては D に聞こう」という「先達」あるいは「先輩」としての位置を確立した。この信頼の獲得によって「布教」、すなわち自身のファン対象である AV を周りに広めることが可能になっている。

Q：AVの話とかを、する人しない人とかって分けてます？どこまでの人には話して、どっからの人には隠してるって。

D：あー、私はもう下ネタが大好きなので、結構割と心許せる子やったら誰にでも

言っちゃいます。で、なんやろう、AV 一緒に観た子たちは、仲良いですし、下ネタとかも OK！ みたいな感じなんですよ、向こうからも。なんですけどサークルの子とかやったら、AV 観たことないみたいな子が多くて、その子たちに、教えてます（笑）

Q：教えてる。

D：布教してます（笑）。そんな感じ。

Q：その人たちとは話さないとかっていうんじゃないかと、布教してる。

D：はい、話せるように。

Q：観てくれるんですか、それで。

D：でも、家とかで観る観方とかも分からへんから、「じゃあ一緒に観よ」って言って。パッと開いて。見せてます（笑）。「興味ある」って言われたんですよ、もちろん。強要はしないですけど（笑）

Q：ああ、それはねえ（笑）。それは良くないですからね。

D：でもみんな [に]、拒否されたことないです。みんな「観てみたい」って言う。

D さんは、『an・an』の付録 DVD を一緒に観た友人と AV の話ができるのは当然として、「心許せる子やったら誰にでも」話している。3-1 項で見たように、好きな AV 男優を非ファンに対して AV 男優として紹介しないのも一つの語りの戦略だが、その方法では、自分が好きになった要因の核心を他者に伝えることはできない。しかし D さんの場合は、「先達」としての信頼を背景に、むしろ「布教」によって、AV について話せる相手を増やしているのである。

以上のように、ファン・コミュニティという重要な聞き手を持たないものの、女性向け AV を視聴するファンであることをあえて積極的に誰にでも語ることで、なぜそれが異常なことなのかと行為遂行的に問い直し、自己像や女性像を書き換える戦略がある。大学やサークルでの学びなど、真面目に性について考えていると他者を納得させるだけの生活史が必要な戦略ではあるが、家族に理解させ、AV を「布教」し、聞き手を周りに増やしていくことが可能になっていた。

4 結論

これまで、ポルノ消費を孤独な営みであるとする理解に対し、ポルノ研究にファン・コミュニティ研究の知見を接続することで、その集団的な消費のあり方を指摘する研究が現れてきた。特に、1 人でポルノを楽しめる時間と空間の獲得によって女性のポルノ消費者の増加を説明する枠組みに対して、日本の女性向け AV を視聴するファンが集い、語る場を得ているというハンブルトンの指摘は重要であった。しかし、女性向け AV を視聴するファンが性について何を語っているのか、それがコンテンツの特性といかなる関係があるのか不明なままであると同時に、先行研究に共通する問題として、ポルノファンのコミュニケーションの場をコミュニティ内部に限定している点があった。

対する本稿は、ファン・コミュニティと個人としてのファンを両睨みで分析する近年のファン研究の視角を、ポルノファンの議論に導入した。これによって、日本の女性向け AV を視聴するファンが、ファン・コミュニティに限らない聴き手に対して語る（語らなければならない）状況に着目しながら、独りの営みではないが他者とは摩擦が起きてしまうポルノ消費の様子を明らかにした。非ファンにファンが語る際は、AV に夢中になっている女性に対する負のレッテルを避けるために、AV 男優を俳優やアイドルのような存在として語る戦略や、あえて積極的に性について話すことで自己像、女性像を書き換える戦略があった。そして重要なのは、ファンであるという表明が摩擦を起こさないどころか共感を生み出すファン同士であっても、マスターベーションやセックスなど自己の性的経験についての話題はタブーになったままであるということであった。そのため、自己の性的経験について語りたファンは、ファン・コミュニティを離れた他の語りの場を見つける必要があった。こうして、SILK LABO 作品を視聴するファンが、ファン・コミュニティのおかげで女性の性について語れるようになったと結論づける先行研究に対し、その性についての語りや腑分けし、ファン・コミュニティ外であっても語れる戦略や、コミュニティ内でも語れない主題の存在を指摘した。

以上より、本稿の貢献として第一に、ポルノ視聴者を「個人」か「(1つの) ファン・コミュニティ」かという大掴みな図式で捉える場合に見落とされるコミュニケーションに光を当てた点がある。独りで楽しめるものとするポルノ理解に対し、ハンブルトンは集い・語る場の存在を指摘するのみ、リンドグレンは語の共起ネットワークを1枚で描き出すのみで、「ファン・コミュニティ」の研究に早上がりしていたといえる。しかし、マスターベーションやセックスなど自己の性的経験についても語りたファンがコミュニティの規範に不自由さを覚えるなど、ファン・コミュニティ内部でも多様なニーズがあった。そして、女性向け AV を視聴するファンとしての自己宣言の問題は、とりわけ非ファンに対して生じうる。しかしそれでも、負のレッテルが貼られることを避けたり、ともにコンテンツについて語り合ったるための技法があった。

そして第二に、ファンの語りの戦略を支えている日本の女性向け AV の独特なコンテンツ性とその受容を、探索的に明らかにした。オフライン・イベントに参加するファンにとって、女性向け AV に出演する男優は「俳優」や「アイドル」のように応援できるものではある。しかし、ファンは、彼らがセックスを実際に行う「AV 男優」でなければならないとも感じている。にもかかわらず、その AV 視聴は必ずしもマスターベーションとは関わらない。このような日本の女性向け AV が、視聴者のいかなる欲望を喚起し、満たしているのか、さらなる探究の道が開かれたといえるだろう。

しかし、本稿の限界として、「性についての語り」とは誰に何を話しているのか、に着目する手段の意義を示したに留まり、その語りのパターンを網羅的に分析できたわけではない点がある。たとえば、本稿では Twitter を中心とするオンラインでの語りは分析しなかった。その利用目的も男優や監督との交流、ファン同士の交流、情報の収集・発信など考えられ、性の語りや内容を聞き手に着目して腑分けする分析はなお有効であると考えられる。

また、特に注目すべき聴き手として「調査者」がいる。女性のポルノ消費についてインタ

ビュー調査ができなかったとする先行研究（赤川 1996b; 守 2010）もあるなか、本研究において男性研究者が女性にポルノ消費についてインタビューすることができた条件は2節にも書いたが、調査現場での相互行為までは分析できなかった。被調査者にとって半構造化インタビューの調査現場は、調査者の研究目的に沿って普段は語らない主題について尋ねられる（もちろん語らないことも選択できる）、普段とは異なる語りの戦略が必要な場である。インタビュー調査での語り、調査者と被調査者の相互行為による協同的なものだとすれば（桜井 2002）、特異な聴き手である調査者に対するファン女性の語りの戦略を分析することは、調査の透明性や社会調査方法論に関わる重要な課題である。

付記

本研究は日本学術振興会特別研究員奨励費（19J21151）の助成を受けている。

注

- 1 池田大臣は、ファンを評価する社会の存在を議論するために、M. ヒルズの「自己宣言の政治 self-declared politics」（Hills 2002: 102）という言葉を用いている。しかし、この表現は、ヒルズがスラッシュ・フィクションのファンの「私はフェミニストではありませんが……」という自己宣言を指して1度用いているのみで、ファンであると宣言することの政治性を指す言葉ではない。ゆえに本稿は、代わりに「“ファンとしての自己宣言”の問題」（池田 2014: 79）という概念で議論する。
- 2 たとえば、2017年7月22日に行われた、一徹のイベント「三徹」のフィールドノートによれば、トークライブハウス「ロフトプラスワン」の席数の上限約150人まで客が入り、ほとんど歩けるスペースがなくなるほど椅子が密集していた。1つのテーブルにつき3~4脚の椅子が置かれており、1人で来たファンも必然的に他のファンと近接する。一徹がSILK LABO 専属男優を「卒業」した後のイベントであり、厳密にはSILK LABOのイベントではないが、イベントの空気、規模感はほぼ変わらないと思われる。このイベントは珍しく男性客も入場できたが、筆者以外に男性客は見つからなかった。
- 3 もちろん、Cさんが周囲のファンを観察して感覚していることであって、その程度には事実だが、これを女性向けAVを視聴するファンに一般化することは本稿の意図ではない。

文献

- 赤川学, 1996a, 『性への自由／性からの自由——ポルノグラフィの歴史社会学』青弓社。
———, 1996b, 「AVの社会史」上野千鶴子編『現代の世相①色と欲』小学館, 167-90。
Busse, Kristina & Jonathan Gray, 2011, “Fan Culture and Fan Communities,” Virginia Nightingale ed., *The Handbook of Media Audiences*, Malden, MA: Wiley-Blackwell, 25-43。
Daskalopoulou, Athanasia, & Maria Carolina Zanette, 2020, “Women’s Consumption of Pornography: Pleasure, Contestation, and Empowerment,” *Sociology*, 54(5): 969-86。
Hambleton, Alexandra, 2016, “When Women Watch: The Subversive Potential of Female-Friendly Pornography in Japan,” *Porn Studies*, 3(4): 427-42。
服部恵典, 2020, 「ポルノグラフィ消費者によるジェンダー化されたジャンルの視聴と解釈——女性向けアダルトビデオを視聴するファンに着目して」『年報カルチュラル・スタディーズ』8, 35-57。

- Hellekson, Karen, & Kristina Busse, 2006, “Introduction: Work in Progress,” Karen Hellekson & Kristina Busse eds., *Fan Fiction and Fan Communities in the Age of the Internet*, Jefferson, North Carolina: McFarland Press, 5–32.
- Hills, Matt, 2002, *Fan Cultures*, London: Routledge.
- 堀あきこ, 2009, 『欲望のコード——マンガにみるセクシュアリティの男女差』 臨川書店.
- 池田太臣, 2014, 「アイデンティティとファン活動——ファンとは誰か?」『甲南女子大学研究紀要. 人間科学編』 (50): 73–81.
- Juffer, Jane, 1998, *At Home with Pornography: Women, Sex, and Everyday Life*, New York University Press.
- Lindgren, Simon, 2010, “Widening the Glory Hole: The Discourse of Online Porn Fandom,” Feona Attwood ed., *Porn.com: Making Sense of Online Pornography*, New York: Peter Lang, 171–85.
- May, Tim, 2001, *Social Research: Issues, Methods and Process 3rd ed.*, Buckingham: Open University Press. (中野正大監訳, 2005, 『社会調査の考え方——論点と方法』 世界思想社.)
- McCormack, Mark, & Liam Wignall, 2017, “Enjoyment, Exploration and Education: Understanding the Consumption of Pornography Among Young Men with Non-Exclusive Sexual Orientations,” *Sociology*, 51(5): 975–91.
- McKee, Alan, 2018, “Porn Consumers as Fans,” Paul Booth ed., *A Companion to Media Fandom and Fan Studies*, John Wiley & Sons: 509–20.
- 守如子, 2010, 『女はポルノを読む——女性の性欲とフェミニズム』 青弓社.
- 大尾侑子, 2016, 「ファン・アイデンティティの宣言に伴うジレンマと処理パターン——ヴィジュアル系ファンへの質的調査をもとに」『ソシオロギス』 (40): 111–32.
- , 2021, 「デジタル・ファンダム研究の射程——非物質的労働と時間感覚にみる『フルタイム・ファンダム』」伊藤守編著『ポストメディア・セオリーズ——メディア研究の新展開』 ミネルヴァ書房, 208–32.
- Plummer, Ken, 1995, *Telling Sexual Stories: Power, Change and Social Worlds*, London and New York: Routledge. (桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳, 1998, 『セクシュアル・ストーリーの時代——語りのポリティクス』 新曜社.)
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』 せりか書房.
- 瀬尾祐一, 2020, 「ファンカルチャーの理論——ファン研究の展開と展望」永田大輔・松永伸太郎編著『アニメの社会学——アニメファンとアニメ制作者たちの文化産業論』 ナカニシヤ出版, 23–38.
- 高艸賢, 2020, 「ファン対象の推移からみる水樹奈々ファンの多様性——商品の意味連関とアクセスポイントに着目して」永田大輔・松永伸太郎編著『アニメの社会学——アニメファンとアニメ制作者たちの文化産業論』 ナカニシヤ出版, 52–65.

(はっとり けいすけ、東京大学大学院人文社会系研究科、ameni.nuretemo0406@gmail.com)

What Do Porn Fans Say and to Whom:

Strategies of Fans Watching Adult Videos for Women to Narrate Sexual Stories

HATTORI, Keisuke

Pornography fans building communities has attracted widespread attention. This is contrary to the general perception that pornography consumption is a solitary activity. Contradicting the framework that explains the increase in the number of female pornography viewers by the acquisition of time and space to enjoy pornography in solitude, it has been pointed out that fans who watch Japanese adult videos (pornographic films) for women have gained places to gather and talk. However, previous studies have assumed that the space for porn fans to talk is limited to community settings. In contrast, this study focuses on what fans of women's adult videos discuss with people within and outside the community, and how they do it. Accordingly, the study reveals the friction between fans and non-fans, the tension between fans with diverse narrative needs, and the narrative strategies of fans to overcome the pressure, which are often overlooked when pornography consumption is viewed in a broader picture of "individual fans" or "(one) fan community."